

放射線科

医長 : 新屋 晴孝

スタッフ : 常勤医師(放射線科専門医) 4名、レジデント 1名

「概要と特徴」

画像診断、放射線治療、IVR(interventional radiology)が主な業務となっている。

画像診断では、当院にはCT2台、MRI2台が導入されており、適切な画像診断を提供できる環境にある。そのデジタル画像はフィルムレスで運用され、放射線科医の読影所見とともに各診療科にオンライン配信されている。放射線治療は年間約170名程度の新患者がおり、CTシミュレーター、三次元治療計画装置を使つての非侵襲的な、効率のよい治療を行っている。IVRは、年間200例程で、肝細胞癌に対する肝動脈塞栓術、透析シャントPTA、CTガイド下肺生検、CTガイド下膿瘍ドレナージなどを施行している。

「初期研修の基本的方針」

見学ではなく、実際に体験できる研修を心がけている。

「研修予定表」

午前中は、主に、指導医とともに胃透視、注腸検査に従事。

午後は、主にCT、MRIなどの画像診断に従事、希望に応じて、放射線治療、IVRを経験。

行事	曜日	時間
外科カンファレンス	毎週水曜日	18:00～19:00
消化器内科、外科カンファレンス	毎週水曜日	19:00～19:30
呼吸器科カンファレンス	第2,4月曜日	18:30～20:00
小児科、小児外科カンファレンス	第2,4月曜日	8:00～8:30

「指導体制」

後期レジデントとのマンツーマンが基本で、放射線科医師の業務を体験してもらう。

「経験可能な症例や手技」

- 消化管造影:胃透視のルーチン検査を一人でできるよう指導するのが目標。
- 画像診断:代表的な疾患の症例のティーチングファイルを検討してもらい、読影の手順を指導。読影に慣れてくれば日々のCT、MRIなどの読影業務を実際に行い、指導医が添削。特に当直で困らないよう、急性虫垂炎、急性膵炎、腸閉塞などの救急疾患のCT読影を重点的に指導。
- 放射線治療:代表的悪性腫瘍の治療設定を体験。
- IVR:大腿動脈の穿刺、セルジンガー法、カテーテルの基本操作法を体験し習得。

「後期研修について」

放射線科の専門研修に進んだ場合、大きく分けて画像診断(IVR も含む)の道と放射線治療の道がある。ただし、本人の希望で両方の研修を行うことももちろん可能。主要な専門医資格には日本医学放射線学会認定放射線科専門医がある。2年間の初期臨床研修後、学会が認定する修練病院で3年間の後期研修を行うと、放射線科専門医(旧認定医)の受験資格が得られる。ここでは診断から治療まで広い範囲の知識を問われる。その後はサブスペシャリティの専門性に応じて画像診断、放射線治療のいずれかを選択して、さらに2年間の研修を積むと放射線科診断専門医あるいは放射線科治療専門医の受験資格が得られる。卒後8年目で専門医認定試験を受験し、合格すれば放射線科診断専門医あるいは放射線科治療専門医として認定されることとなる。

当院は放射線科学会から研修病院あるいは修練病院としての認定を受けている。

「研修責任者よりひとこと」

現在の医療現場では、画像診断の重要性は高まる一方です。放射線科研修を通して画像診断のおもしろさ、重要性を実感してください。

* 「Q & A」

Q. 放射線科の研修を受けるとすぐに CT や MRI の読影ができるようになりますか。

A. 画像診断(読影)には解剖の知識と各疾患に関する知識が必須です。したがって、内科や外科などの研修を終えられた先生にとっては、画像診断はさほど難しいことではないと思われます。しかし、同じ疾患でも画像上に現れる姿は様々であり、時として思いがけない他の疾患を合併していることもあり、それらを丹念に読影して第三者にもわかるようにレポートにまとめるという作業は、ある程度の数を経験する必要もあり、時間と経験を要することも事実です。

Q. 放射線科での女性医師の待遇はどうですか。

A. 放射線科医は自分で自分にあった仕事を選ぶことができます。小さな子供のいる女性にも無理のない仕事がたくさんあり、家庭の仕事しながら、社会への貢献ができます。仕事と家庭のどちらにいても自分も自分らしく生きることが大切なことです。

Q. 放射線科専門医の需要はどのような状況でしょうか。

A. CT や MRI を有するようなある程度の規模の病院では、放射線科専門医を置くことにより、画像診断管理加算を算定できるようになりました。正確な診断のためにも、病院経営のためにも、放射線科専門医の需要は伸びるばかりです。優秀な放射線科専門医は全国のどの病院でも必要とされており、求人募集が絶えません。

研修希望時の連絡先 : 放射線科 向井 敬